



子育て施設課
0823-25-3144

夏に注意する皮膚の感染症

皮膚の病気は一般的にうつるというイメージが多いと思いますが、実際には人から人へうつる病気は非常に限られています。ただし、夏場は汗をかくことが多く、また子ども同士で肌と肌が触れ合う機会も多いことから、いくつかの注意が必要な感染症があります。

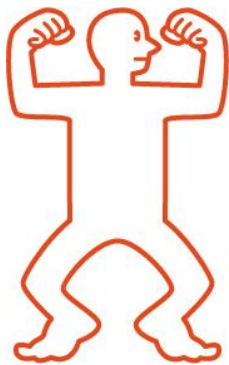
でんせんせいのかしん とびひ (伝染性膿痂疹)

虫さされや湿疹などのかゆみを伴う症状があると、そこをひっかいて傷ができます。汁が出るようになると、その部分には、主にはブドウ球菌が感染して細菌の数が爆発的に増えます。その増えた細菌から外毒素がいどくそというものがつくられ、皮膚を傷害することで、水ぶくれが出来てきます。その中には、たくさんの細菌がいるため、水ぶくれが破れて出てきた汁が外の場所や、他の子どもにつくと同じ様な症状を起こし、次々と感染していくため『とびひ』と言われます。

治療は抗生剤の飲み薬と、塗り薬が基本となりますが、かゆいことが多いため、ステロイドの塗り薬を併用することがしばしばあります。以前は傷があるときには、お風呂に入るのを禁止していた場合もありましたが、最近では逆にお風呂に入って傷を洗い、その場所にいる細菌を洗い流すほうが、有効であると考えられています。

塗り薬のみで治ることは非常に困難ですので、かゆみがあり水ぶくれが出来るといった場合には早めに受診しましょう。





みずいぼ でんせんせいなんぞくしゅ (伝染性軟属腫)

伝染性軟属腫ウイルスによって引き起こされます。ごま粒から米粒の半分くらいまでの小さなぶつぶつができます。ぶつぶつの中央は少し白っぽく見える部分があり、つぶすと白い小さな固まりが出てきます。この固まりの中にたくさんのウイルスが入っています。

治療の基本は、ピンセットなどでつまんで取ってしまうことです。その際に痛みを伴うことや、自然に治ってしまう子どももいることから、医師によっては無治療で構わないと考える人もいますが、アトピー性皮膚炎のある子どもなど、皮膚の弱い子では急に数が増えることがしばしば見られ、兄弟や友達にもうつることが多いことから、治療を行うほうがよいと思います。最近ではピンセットで取る前に、麻酔のテープを1時間くらい前に貼り付けておくことで、かなり痛みを抑えることも出来るようになりました。数が少ないうちでしたら短時間で治療は終わりますから、子どもの負担も少なく済みますので、みずいぼを見つけた場合には、出来るだけ早く受診しましょう。



みずむし はくせん (白癬)

みずむしは、白癬菌というかびの一種の感染症です。かびは暖かく湿ったところで成長しやすい特長がありますから、みずむしも暖かい時期に悪くなります。

足のゆびの間や足の裏などの皮がうすくむけてきた場合、足白癬(みずむし)の可能性がありますが。子どもの場合多くは、汗の腺がつまって小さな水ぶくれができ、それが自然にやぶれて皮がめくれてしまう『汗疱』かんぽうという病気ですが、見た目だけでは判断が出来ないため、めくれた皮膚を顕微鏡で調べる必要があります。みずむしだと思ってあわてて薬を塗ると、みずむしか汗疱かの判断が出来なくなることもあるので、可能であれば無治療で受診してください。また、子どもの場合は足のみずむしより、体や頭などにみずむしの菌が移ることが多く、表面ががさがさしたまるい、わっかをかいたような赤～薄茶色のぶつができてきます。

ネコのみずむしの菌がヒトに移ることも時々あり、普通のみずむしの菌より激しい症状を引き起こします。強めの治療が必要なこともありますので、ペットに皮膚の症状があり、かゆいできものが出来た場合には早めに受診しましょう。

ほけんだよりは、呉市のホームページでもご覧になることができます。

URL <http://www.city.kure.lg.jp/~kodosise/hoken.htm>